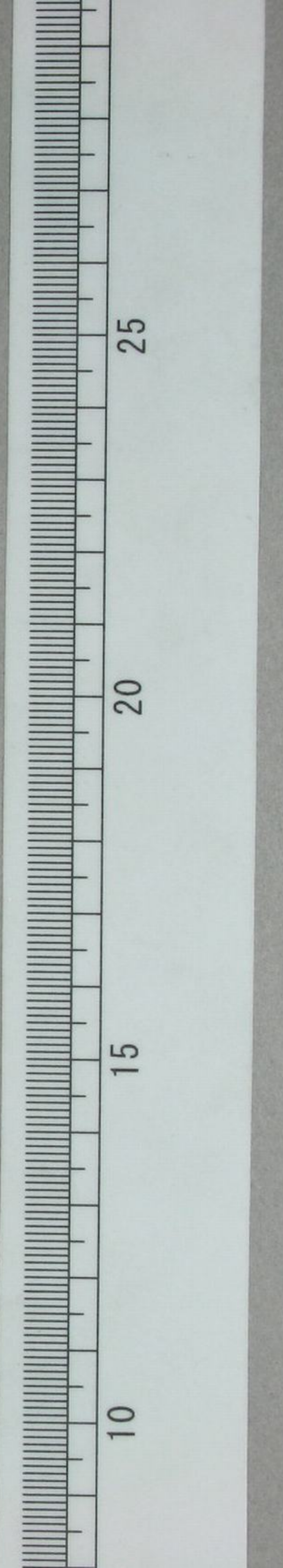




鹿 児島 戦記 第七
藤田久三郎編
加賀貞吉撰



A432
6

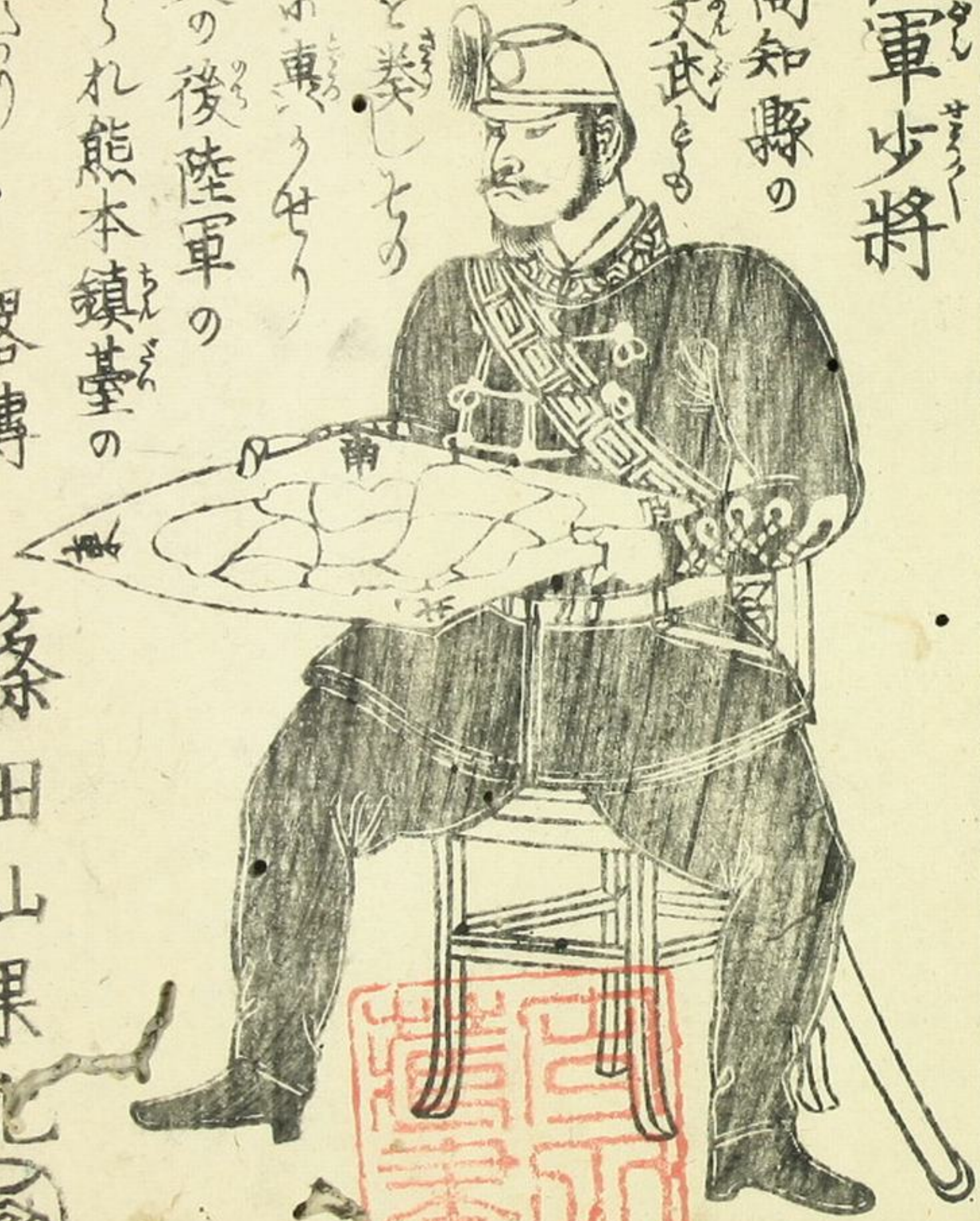
篠田仙果録
永為益道

繪本 鹿兒嶋戰記

東京 青成堂 板

谷陸軍少將

公少乃高知縣の
士族の文武兼備の
維新の際
名と天下の真の
皇國平定の後陸軍の
少將に任ぜられ熊本鎮臺の
司令長官



篠田仙果記

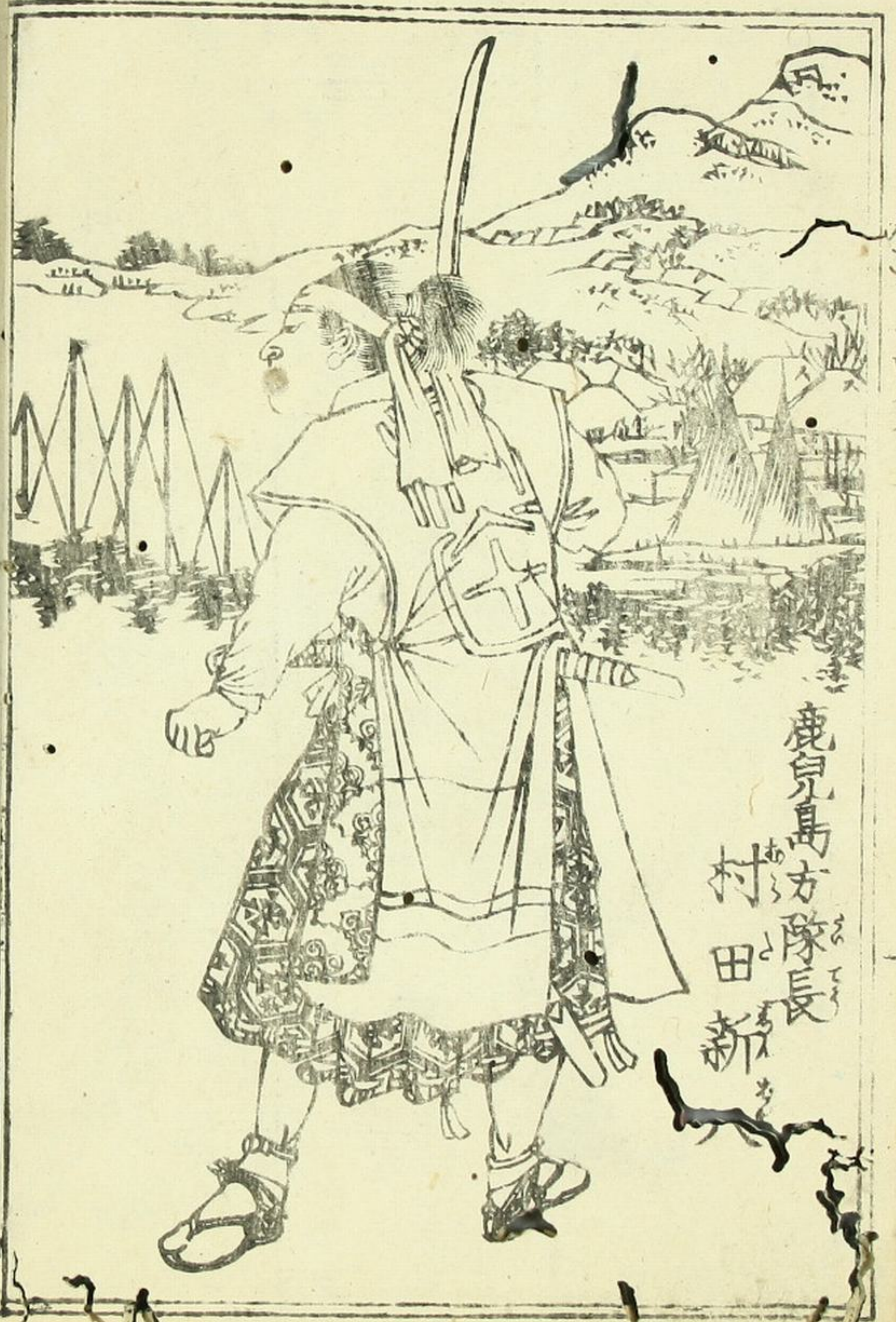
畧傳

鹿兒島方一將



鹿兒島方一將
逸見十郎太

鹿兒島方隊長

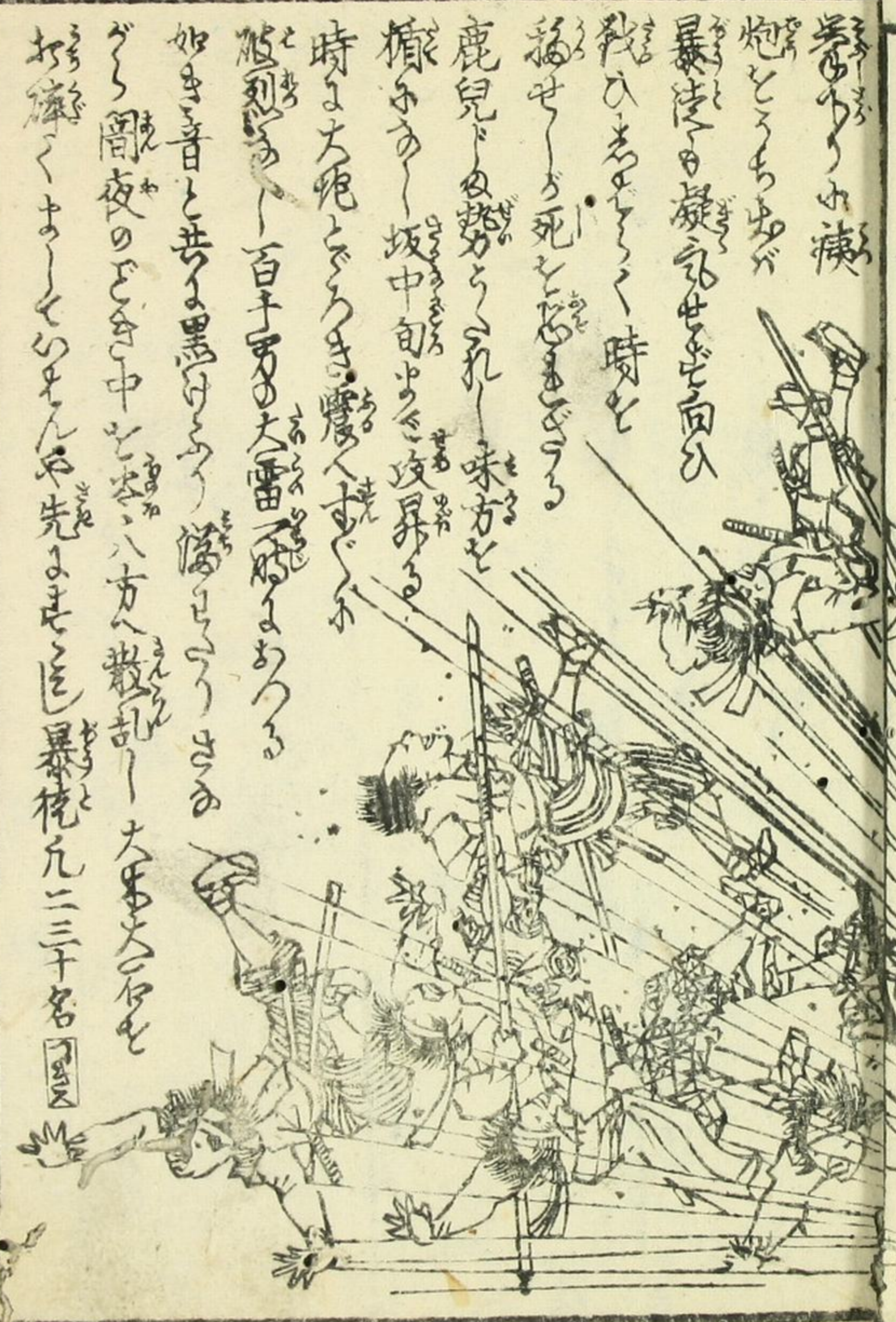


鹿兒島方隊長
村田新

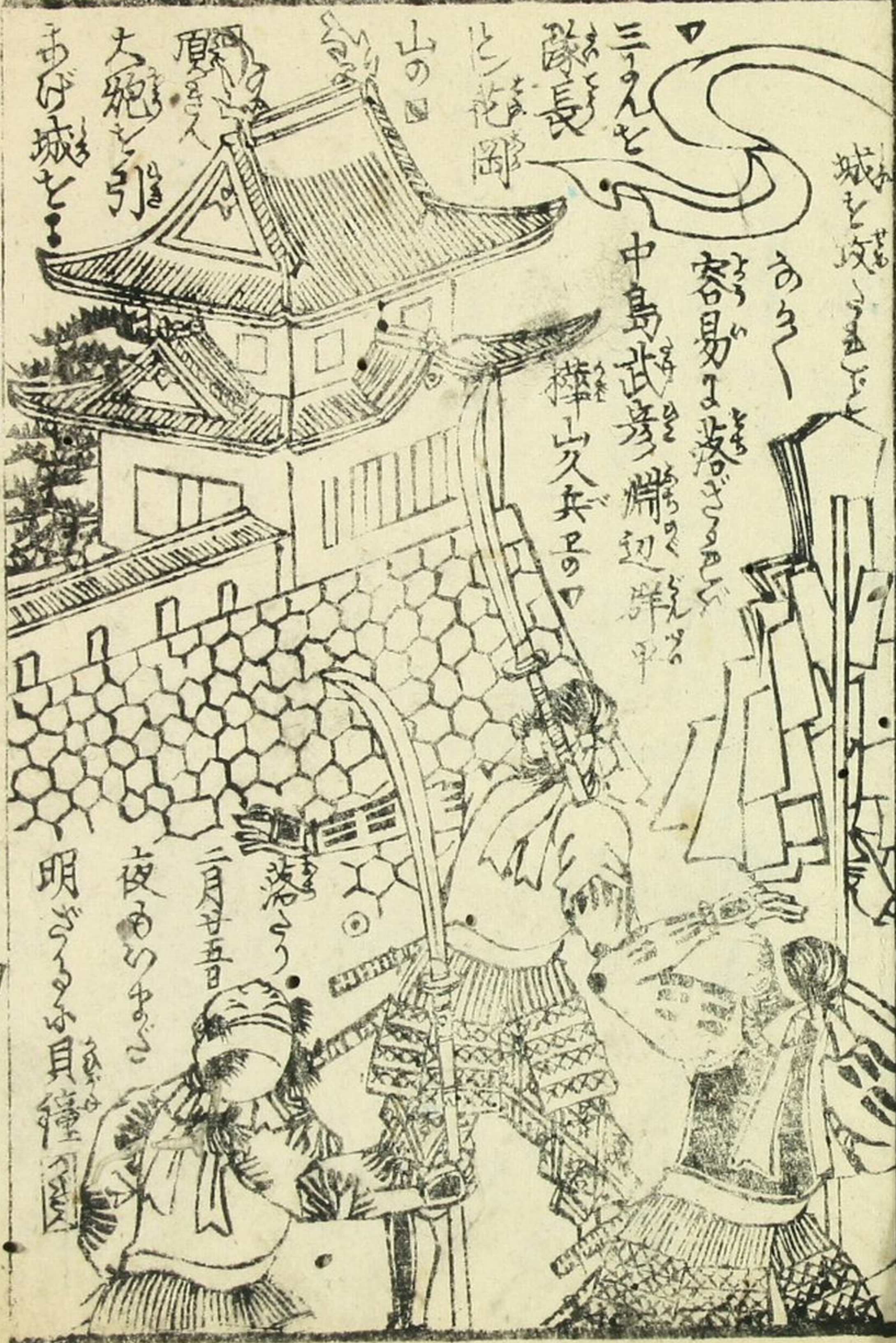
鹿兒島戦記四編上巻

東京 篠田仙果編輯

さつて日熊率入乱入
 せし鹿兒
 老ものソ
 徒の暴
 本妙も
 山とあつり
 法華坂より
 と一寄ふ熊平兵
 出張り坂の上より



鹿兒島戦記
 砲とちあつり
 暴徒の疑心せむを白ひ
 殺ひもあつり時を
 福せし死とあつり
 鹿兒島戦記
 櫓の中旬より攻界る
 時より大砲とあつり
 破烈なる百千男の大雷
 如き音とあつり
 ぐる間夜のとほ中
 おぼくよとあつり



山の
 大砲を引
 あび城と

城を攻めしむ
 あき
 容易に攻めしむ
 中島武彦 辨辺 伴平
 樺山久兵衛

二月廿五日
 夜ものや
 明がともす 貝鐘

夷記 島四篇上



空中へうち上られ 徹摩とありと
 谷少将が
 埋る地
 雷火

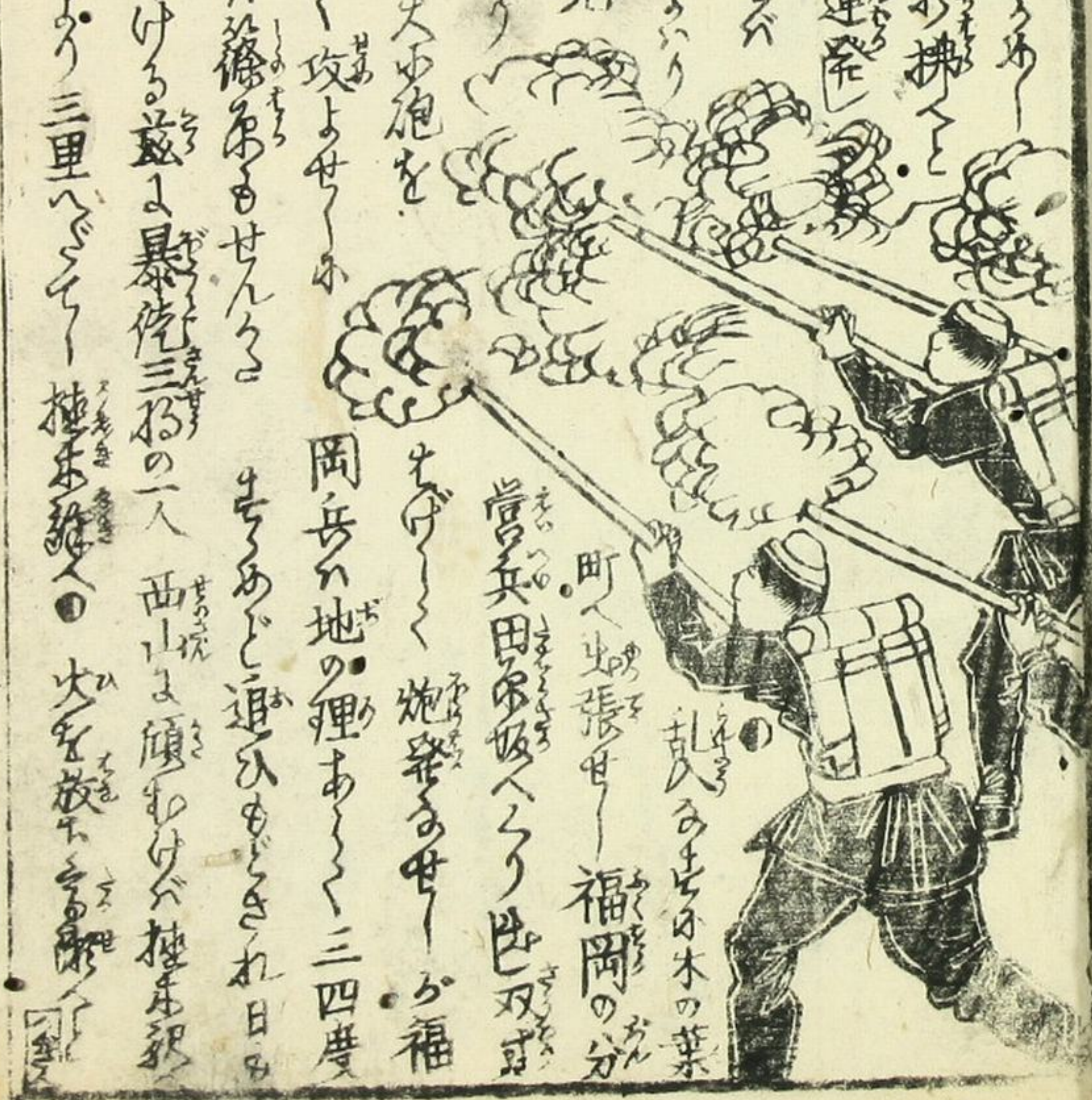
武者の暴徒者も
 舌震ひて大いよ
 二月廿三日 篠原 國幹
 安政

目的は
 皆途中

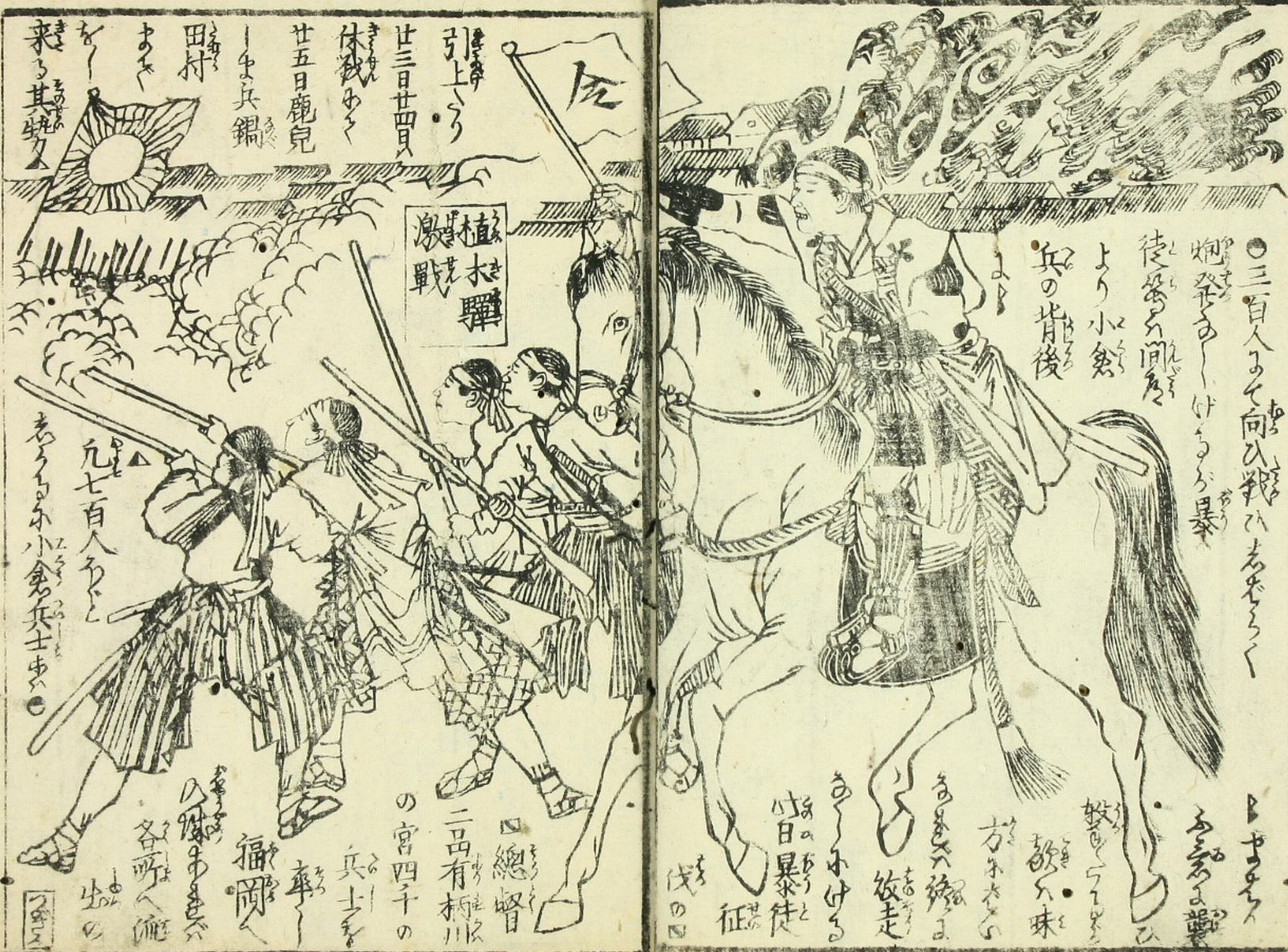
志氣を乱調より立ち驚波を
 造り能く城の入り口へせよ
 たり城の中までこぼれを突アラた
 一き物音うると櫓は昇り強中
 此の昨年春第一隊の
 煽動されて
 暴走せし能く士族
 の社風もんくあせり
 お漏されし者今度
 鹿兒島の暴徒は組
 先陣のまじしを甲冑
 烏帽子あどを形勢難か



の海ものを携え入りし
 けし押あさりそれお拂
 城中より野戦砲を連発
 二三十人やとうち倒せ
 残り者ども狼狽し
 ちりちり逃し見
 苦しかりける次第あり
 へ勢うと暴徒も大砲を
 おろけく城門を攻めし
 城中あまよく防げぬ餘ありせん
 あく遠巻をあけける茲は暴徒三
 桐野利秋は能く三里へ



町へ出張せし福岡の
 營兵田原坂へ入りし
 乱るし木ノ葉
 火を放ちし
 岡谷の地は埋あき三四度
 火を放ちし
 西山は傾むけし
 五



歴史山四卷一

○三百人より向ひ戦はるる

徳兵衛の陣より小倉兵の背後

ト云ふ
 小倉の陣
 敵の味
 方小倉
 故走
 日暴徒
 征伐

引上り
 廿三日廿四日
 休戦あり

激戦
 植木驛

廿五日鹿兒
 一兵鍋

田村
 来る其勢

九七百人
 小倉兵士

總督
 二品有柄川
 の宮四千の
 兵士を
 率へ
 福岡へ
 各所へ
 出

東日記四卷一

鎮基兵猛威

さくんとありふ

けり○又下るの

暴徒等

高瀬

乱入一舟隈川

福屋小倉

両鎮台の兵と

我の官軍

立ち立られ

伊倉村

退き

廿六日早天より

暴徒又

来り

狭間川の兩岸

より砲我數刺

乃官軍の二

あり竊や川を

渡を挟もう

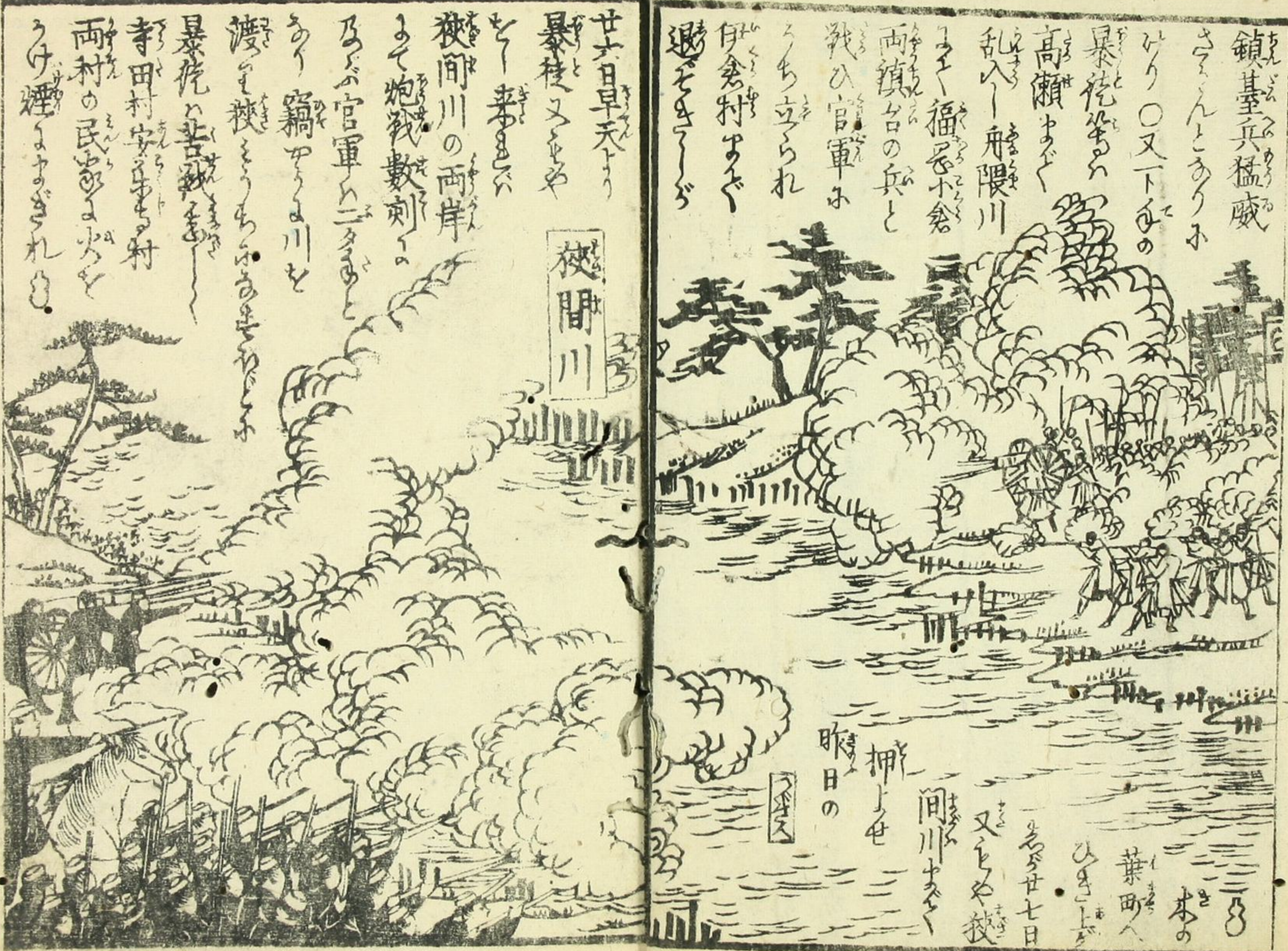
暴徒の苦戦

寺田村安

兩村の民

うけ煙

狭間川



昨日の

押上

間川

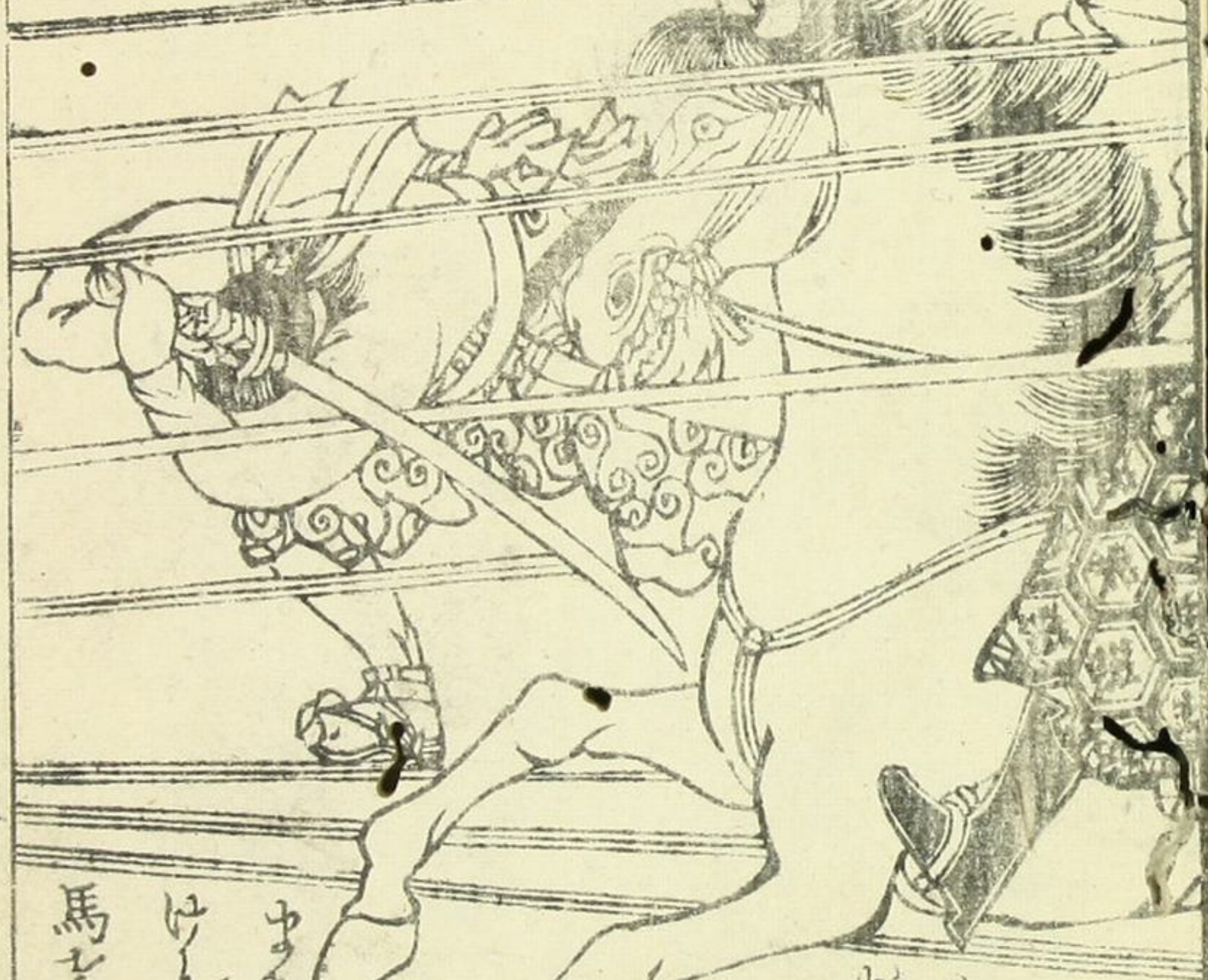
廿七日

ひき

葉

本

官軍の兵を
 南の陣へひき
 揚げる二月廿八日
 鹿兒島の
 縣下小あらい今
 張亮とあまを
 どり勇猛衆よ
 秀でたる村田三助
 二天隊ひきつる
 高瀬口の官軍を
 うち破らんとも



二十日
 難をた
 ひ小狙殺
 時をうつ
 強氣の
 三助の
 体をこ
 まれる
 思ひ
 けん陣
 馬を
 破らんとも

恥辱を
 かん死奮
 勇をあ
 終る川を

おい
 まを近衛
 大坂小倉
 兵とら



二天隊
 方も
 鹿兒
 強氣の
 三助の
 体をこ
 まれる
 思ひ
 けん陣
 馬を
 破らんとも

▼突つてもいさうらひる
やのぞ死骸をよび越え
進みゆく鎮臺兵も
乱れんとす近衛大坂
敵兵の散兵とあり
防ぎ居る三助も
弾丸を數ヶ所うちぬれ
高瀬の露と消えけり
隊將うたも暴徒等
ちりくふ成りしけり

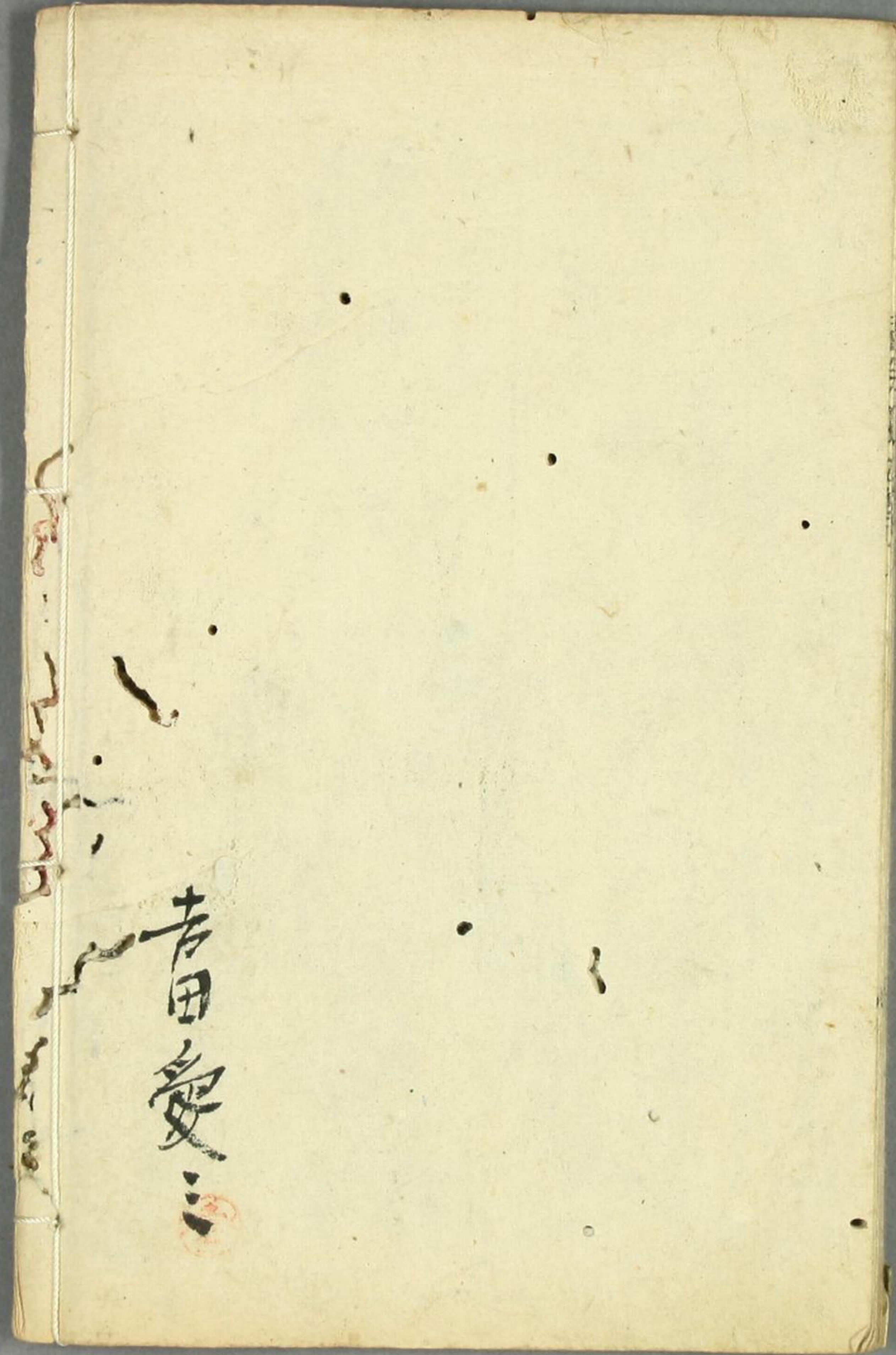
鹿兒島戦記四編上巻終



人々をよび奉りせしと号令の
細もうち握り敵中から入り込ん
だり暴徒等も一刃の切
無二をよ押し

海軍明治元年四月廿七日

010190510412



Vertical text along the left edge, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

書田愛